

# イギリスの19世紀後半から20世紀初頭における女性の高等教育の状況

## オックスブリッジにおける女性カレッジの教育的役割と意義

沖塩有希子

### はじめに

本論文の考察課題は、イギリスの19世紀後半から20世紀初頭のオックスブリッジの女性カレッジが女性達の間人形成に果たした教育的役割と意義を究明することにある。

まず、先行研究と関連させつつ、女性高等教育史における本論の位置づけ・問題設定・考察方法を論じていきたい。

なお、以後は、「オックスブリッジにおける女性カレッジ」を「カレッジ」と略記する。本論文に関わる先行研究は数多く散見される。その研究動向の特徴を3点に集約して示せば、第1に、女性の高等教育の確立＝フェミニズム運動の結実として捉えることへの疑義が挙げられる。19世紀後半からの女性の高等教育の確立を、女性の社会的・政治的権利獲得を目指して奮闘したフェミニストの成果に全面的に帰するという、同領域の研究に着手した当初のいわゆる古典的研究の素朴とも言える見解は、大幅に修正されてきた<sup>1</sup>。

第2は、女性の高等教育システムの確立＝進歩とみることへの異議が挙げられる。女性高等教育の発展を手放しに進歩と評価し、その前進の過程を跡づける立場に対しても批判的な見解が主流になってきた。つまり、女性の高等教育制度の整備が女性の機会拡大に寄与した面を否定はしないものの、ジェンダーを基底とする価値が厳然として存するその教育の内実を暴き出し、女性に向けての家庭的役割に収斂した理念を補強する方向にも加担したとみるスタンスは、女性学の深まりとも連動して確実に定着してきたと思われる。

---

沖塩 有希子（おきしお ゆきこ） 青山学院大学

第3には、従来 研究対象として集中的に取り上げられてきた、伝統的な大学であるオックスブリッジの女性カレッジやそこでの女性達ではなく、後発である市民大学や その中の女性達に着目する研究<sup>2</sup>へのシフトが確認されることである。

以上の諸動向のうち、特にギバート (Gibert, Julie) による市民大学の女性達に関する研究から筆者は着想を得たので、氏の研究と関連づけて本論の問題設定と考察方法を述べたい。

ギバートは、①市民大学の学生達の活発な課外活動、②市民大学の共学制度の下での女性達の明らかに有力な地位が、市民大学とオックスブリッジの女性カレッジの主な違いであること、そして、市民大学の女性達は、カレッジの女性達ほどにはジェンダーによる差別を経験していなかったことを論じ、カレッジに対する市民大学の優位を主張している<sup>3</sup>。

しかしながら、筆者は、ギバートなどの女性高等教育史の研究者による、カレッジやその女性達のジェンダーに根ざすあり方を負の要因とみる立場を問い直すことを試みたい。(2節で述べるように、)確かにカレッジの女性達のジェンダーに起因する保守性は歴然としているが、彼女達は漫然と社会通念にからめとられていたばかりではなかったと思われる。さらに発想を変えれば、保守的な性質を備えたがために、ヴィクトリア朝期という女性に対する厳格な家庭礼賛の理念の遵守が求められた時代にあっても、カレッジは周囲との激しい摩擦を引き起こすこともなく、適度に安定した教育機関としての存立を維持し得たとの解釈が成り立つと思われる。加えて、(3節において詳述するが、)カレッジの創出した文化についても、女性達の成長に影響を及ぼし、教育的役割・意義を確固として持ち得たがゆえに肝要であったと筆者は把握している。その文化の中でも特に重要と筆者が考える3点——①討論 ②ココア・パーティー ③個人部屋——を具体的に提示して考察を進めたい。

翻って、上記の事柄を論究していく際には、ギバートのように市民大学との対比でカレッジを検討するという形は採らない。筆者自身の考察方法は、カレッジやこの中で女性達を取り巻く文化的・社会的状況に留意し、これとの連関によってカレッジやその女性達について検討するというものであり、このアプローチによって、カレッジの果たした教育的役割と意義をより一層積極的に捉え直すことができるのではないかと考えている。

したがって、本論の展開は次のようになる。1節で、カレッジや女性達をめぐる文化的・社会的な制約の状況に関して言及する。2節では、1節と結びつけながらカレ

ッジの女性達の 保守性と革新性を共存させた二面的性質について述べる。3 節では、カレッジで創造された文化が 女性達の人間形成に果たした教育的役割と意義に関して論じることにする。

## 1. オックスブリッジの女性カレッジの女性達を取り巻く文化的・社会的制約

本節では、本論文の考察上必要と思われる点に限定し、カレッジ生活を経験した女性達が属するミドルクラスの女性達が置かれたヴィクトリア朝時代(1837-1901)——ただし、同時代は「1815年のナポレオン没落から1914年の第1次世界大戦の勃発に至る期間をおおまかな範囲とする19世紀に漠然と適用されてきた<sup>4</sup>」とされるので、本論でもヴィクトリア朝期を同様に広い意味で扱うこととする——の文化的・社会的制約状況について述べる。

まず、ヴィクトリア朝時代に特有の社会通念としてしばしば取り上げられる「リスペクタビリティ (respectability)」という価値基準に関して言及することから始める。19世紀の史料の中には、ミドルクラスを指示するにあたって、「middle and respectable class(es)」の表現が頻繁に使用されていることを村岡が指摘しているように<sup>5</sup>、リスペクタビリティの理念は、とりわけ当時のミドルクラスの精神文化の中核を占めるものであり、同階級のあり方に相当に影響を及ぼした価値であったと考えられる。「リスペクタビリティ」の本来の語義は「尊敬されるに値すること」であり、敬意の感情を抱く他者の存在が想定されており、他者から敬意を払われることを求め、かつ、他者の目に自分自身がいかにかに評価されるかを意識するもので、体面や世間体といった意味も内包しているという<sup>6</sup>。

では、そのリスペクタビリティを、(本論の考察対象である)カレッジの女性達が所属するミドルクラスの女性にとっての理想形と結びつけて述べるとすれば、健全で温かな家庭において、閑暇や消費を基調とするレディ然とした生活様式を維持し、貞淑な妻・賢き母・あるいは 品格ある娘として家庭の精神的・物質的事柄に配慮し、家族の精神と身体を癒すいわゆる「家庭の天使<sup>7</sup>」のイメージになるであろう<sup>8</sup>。このように女性の居場所を家庭に限定し、その安息の場としての機能を重視して女性の第一義的な役割を妻や母であることに求める考え方は「家庭重視イデオロギー (domestic ideology)」と措定されるが、パーヴィス (Purvis, June) は、これを19世紀以降の女子教育を規定する重要概念と論じている<sup>9</sup>。

また、リスペクタビリティ同様、当時のミドルクラス女性に重んじられた価値とし

て、「自己犠牲」があったといわれる。「無私と自己犠牲を尺度とした〔女性の領域〕の価値観は、19世紀を通して女性の生活を縛っていた」のであり、「家庭に縛られた独身女性達は、両親や兄弟の死後やあるいは父親の退職によって初めて、家族や教区への義務を免れ自分の人生を生きることができた」<sup>10</sup>という。一例を挙げるなら、イギリスでの女性の高等教育分野の先駆者であるデイヴィース (Davies, Sarah Emily) は、20歳代の大半を兄や姉の世話に費やし、姉の死後はゲイツヘッドの実家で過ごしたといい、彼女が31歳の時の父親の死を契機として母親と共にロンドンに移って以後ようやく、かねてからの念願だった女性の高等教育の実現を目指して本格的に始動することになったのである。

次に、ミドルクラスの女性に向けた「家庭重視イデオロギー」や「自己犠牲」が理想化される風潮が厳然としている最中で、女性が学ぶという行為に対しての世間のまなざしがいかなるものであったのかを述べるが、シュウェル (Sewell, Elizabeth) の『教育の諸原理 (Principles of Education, 1865)』の件は当時の見方を象徴しているように思われる。

…女性の精神というのは (男性の精神と比べ) より一般的教養を必要とする。妻というのは、夫の客を楽しませ、賢明に感じ良く会話の調子を盛り上げる、彼にとってのパートナーであり友人であるべきである。そして、男性が所有する知識を引き出し、男性に話をさせることを可能にする 歴史・地理・科学といった一般的知識を持つことで初めて、妻は、彼のパートナーや友人になれ、そうしたことを行えるのである。社会の中で主張したり教授したり説教する女性というのは、自分の役割を忘れてしまっていてきわめて不適切である。しかし、女性が、自らの考えや知識を他人に上手に話をさせるために活用するのなら、女性の影響力というのはきわめて有益である<sup>11</sup>。

なお、当代社会に流布していたとされる、「少年は世界のために教育され、少女は客間のために教育される<sup>12</sup>」という表現からしても、女性が物事を学ぶ時、自分の向学心に徹底して忠実であるとか、特定の領域に精通する学問追求の姿勢というのは、賞賛すべきものとはみなされなかった。女性の学習は、客間やサロンでの会話に彩りを添えられ、一家の男性の良き伴侶、もしくは、子どもの導き手を担い得るレベルの素養や知恵を備えれば十分に制限付きのものであった。すなわち、ミドルクラスの女性の学びは、夫や子どもといった家族へ献身的に働きかける「家庭の天使」としての

任務を遂行するためにこそ求められたのであり、学習を通じて習得する知識や技能は、その役目を効率良くこなすための手段とされ、概して、アコンプリッシュメント (accomplishments, たしなみと訳される) と呼ばれる初歩的なフランス語会話・音楽 (歌唱・ピアノ) などの皮相な教育の域に留まった。

19世紀後半に至り、そうしたミドルクラスの女性の貧弱な教育状態が俎上に載せられ、改善を目指す動向が現れて、その結果 高等・中等両教育システムが漸次確立されてはくるものの、「ヴィクトリア朝社会は、女性の知的向上心を利己的とみなしがち<sup>13</sup>」であり、ミドルクラスの女性が学ぶということへの完全なコンセンサスがまだ社会一般から得られていない状況下にあったので、高等教育機関としてのカレッジに関わった女性達というのが、きわめて特異な存在として世間に映ったことは容易に推測できる。

女性の高等教育への進学に対する当時の見方に関しては、バースティン (Burstyn, Joan) が詳細に論及している。ここでは、本論を展開する上で必要と考えられる、同教育への否定的スタンスについてのみ、筆者が3点に大別して提示することにする。

第1には、キリスト教的見地からの批判的立場があった。わけても福音主義者による非難は激しかったという。同主義者は、信仰に立脚して男女の性質や生活領域の違いを訴え、女性に対して自己犠牲的な行動を求め、男性の支援者として家庭での任務に徹することを神の摂理と説き、女性に向けた既存の理念の強化を図り、女性が高等教育を受けることに反対したという。第2に、科学的・医学的見地からの批判的な立場があった。この提唱者もまた、女性の役割領域を家庭に限り、さらに、女性の知的能力は男性のそれより劣るので、女性が不得意とする知的分野でエネルギーを消耗することは、女性の健康・精神・将来の生殖機能にまでダメージを与える危険性があるとして、男性と同等の高等教育に難色を示し、女性を対象とする別個の高等教育の代替策を提案したという。第3は、第2の点を主張する者と重複する場合が見られたが、男性医師が、自らの職業上の保身のために、女性の医師職参入の阻止を狙って女性の高等教育に異議を申し立てた立場があった<sup>14</sup>。

以下においては、そうした女性の高等教育をめぐる否定的な見方が瀰漫する社会状況の只中であって、実際にカレッジを進むべき方途として選択した女性に対する周囲の反応、そして、彼女達本人の心情がいかなるものであったのか、事例を交えて述べていく。

ロイド (Lloyd, Anna) は、1868年、女性を対象とするヒッチン・カレッジ (Hitchin

College)<sup>15</sup>の開校をデイヴィースから聞かされ、進学を決断した直後に次の手紙を書いた。

私の姉妹や友人達は驚愕して見えています。カレッジ進学は、世間をあっと言わせるような新たな大事件なのです。…私が結婚することになっていた方がずっと良かったと彼女達が思っているのが私にはわかります。多分そうかもしれませんが、その状態が全てではないでしょう。…私 が陥っている困難は、招待を断らなくてはならない状況にあることです。結婚社会が、独身の未婚の若いレディを役得とみなすことはわかっています。私はこれから外れていっていますが、困難とか燃えるような思いを感じていない訳ではないのです。なので、私はびくびくおののいてしばしば自問します。私がとても愛していて、夕食を共にするこの人達の友情と愛情をもしも失ったらどうしよう？ 私はどうするべきだろう？ これは真剣に熟慮すべきことなのです<sup>16</sup>。

さらに、彼女は、ある時ロンドンの列車内で、「ああ！これがヒッチン・カレッジかね。するとあれが女性カレッジの建物で、不信心者の巣窟だね。」と牧師が話すのを聞き不愉快な思いをしたことも回想している<sup>17</sup>。相当の決意を持ってカレッジ生活に臨んだロイドであったが、カレッジ進学後もカレッジを退学するよう姉達の執拗な説得が続き、4度の学期を過ごした後にわがままだと非難されたため、やむなくカレッジ生活を断念している。

1913年、オックスフォードへの進学を目指していたブリティン (Brittain, Vera) に対する隣人達の反応も、約50年前のロイドの時と大差はなかった。ブリティンの述懐によると、彼女の母親は、ある女性から、「まさかお嬢さんに結婚して欲しくないわけではないですよ？」と悲嘆に暮れてたずねられたという。両親はブリティンの進学準備を何ら支援せず、兄弟がラテン語・数学の勉強を手助けした<sup>18</sup>。

ブリティンと同時期に、ニューナム・カレッジ (Newnham College)<sup>19</sup>の学生であったハミルトン (Hamilton, Mary Agnes) は、「第1次大戦前、私がカレッジに在学していた時、[あなたはカレッジで学んでいるんですって？]とよく聞かれたもので、まるで私のスカートの下から角やしっぽが現れるのでないかとじろじろ見られたものでした<sup>20</sup>」と述べている。

これらのエピソードからうかがい知れるように、カレッジを志す女性というのは、周囲からの冷ややかなまなざしや態度を被るケースが度々あった。それは、本節で述

べてきたが、彼女達が、当時のレディのリスpekタブルな姿とされる、家庭を基盤とした自己犠牲的なあり方から逸脱した存在と捉えられたからである。科学的・医学的立場からも、彼女達が高等教育を受けることの身体(生殖機能)・精神への損傷の可能性が危惧された。仮に、ロイドのように、これまで築き上げた肉親や友人とのかけがえのない関係を損なうほどの代償を伴うにしる、それを承知でカレッジに学びたいという決然たる覚悟が求められるまでの厳しい現実が、カレッジ進学を希望する女性達の眼前に立ちはだかることもあった。

なお、カレッジの女性達が教養教育を受けるにあたって、当時の家庭礼賛の通念や自己犠牲的な価値が斟酌されるべきとみなされており、将来リスpekタブルな家庭を維持し、夫の知的パートナー・子どもの導き手としての役割を十分に担える、真正なレディの資質を身につけることが目指されたのであって、女性達本人の自己実現や真理探究に即して無条件、かつ、純粹に知性を追求することが称賛されていたわけではなかった。

## 2. オックスブリッジの女性カレッジの女性達の二面性

1節において述べてきたように、伝統的に男性の占有物であり続けてきた高等教育への女性の参入に対する文化的・社会的抵抗を目の当たりにするシビアな状況にもかかわらず、その機会を自身の手の中にも収めようと求めたがゆえに、カレッジの女性達の言動は複雑な様相を呈することになった。デラモント(Delamont, Sara)は、その状態を、いみじくも「二重の従順(double conformity)」と表現する。氏によると、「この二重の従順——二重の拘束状態、あるいは、板ばさみ——とは、教育者と教育の受け手の双方が、2つの厳格な基準を徹底して遵守することであり、その基準は、常日頃のレディ然としたふるまいと、支配的な男性の文化・教育システムに関わるもの」だという。女性達は、「男性と同一期間で同等の教育目標に向けて競うことを吹き込まれながら、さりとして、レディらしくないとか、もっと悪ければ女性らしくない、とみなされる恐怖感を拭い去ることもできず、避けがたい落とし穴——二重の従順の落とし穴——にはまり込んでいた」<sup>21</sup>という。

確かに、カレッジの女性達は、男性の牙城であった大学教育に相当する、古典科目の教養教育を核とした高等教育に範をとるという革新的な要素を帯びながらも、同時に支配的なミドルクラスの女性像に挑むことはせずこれを受容するという保守的な要素も保持したので、デラモントの指摘のように背反する二面性を備えていたとみ

られる。例えば、1883年の『学生の手によるカレッジ誌 (*The Girl's Own Paper*)』によると、「ウェストフィールド・カレッジ (Westfield College) には、学問上の活発な仲間づきあい同様、英国の家庭生活の魅力もあった」といい、学生達は、「奇抜な意見にも服装にも影響されることなく」、「午後には、学生全員でマーマレード作りを楽しんだ」という<sup>22</sup>。その他、1899年にニューナム・カレッジの学生だったクウィギン (Quiggin, M.A.) の回想では、「同カレッジの重要目標はできるだけ目立たないこと」で、「服装でも言動でも、人目につくことは何でも強硬に不可とされた」という。また、ある学生が、彼女を指導する講師と在学中に婚約したことに対し、学問の礼節を欠くと考え、学生達は皆婚約を認めなかったとも述べている<sup>23</sup>。

ダイハウス (Dyhouse, Carol) が論じているが、「女性の知的向上心を利己的のみながちであった」社会にあって、カレッジの女性達を始めとする向学心の旺盛な女性というのは、「気後れや罪深さを感じていた」だろう。「家庭的義務と、女性らしからぬ知的変化の要求・知的向上心との間で悩まされ」、彼女達は「その葛藤のありがちな解決策として」、「自覚して、もしくは、無自覚で、自らの知的向上心やエネルギーを、神や男性への奉仕という伝統的に女性らしい領域に向けようとし」、「これによって、自身の学問を追求するため家庭生活に関わる要求を減らしたり拒んだりすることへの罪意識が軽減」されたのであった<sup>24</sup>。

先のクウィギンによる回想などの事例が示唆するように、カレッジの女性達が保守的傾向を依然として維持していたことは明白なため、この彼女達の保守性を、カレッジにおけるジェンダーに根ざした負の要因として主張する (本論冒頭部で示した) ギバードらの見解も理解できない訳ではない。しかしながら、筆者の見方としては、女性達のそうした保守的態度の維持こそが、レディの教育として妥当とされていた装飾的なたしなみ教育に代わり、カレッジという高等教育機関での学問探求を現実のものとなし得た誘因ではないかと考える。つまり、ヴィクトリア朝期という女性に対する家庭重視の理念の縛りが強力で、女性の知的向上心を利己的と非難する、カレッジの女性達にとってシビアな時代状況にあっても、自らに向けられたその価値観と折り合いをつける立場を彼女達が貫いたがために、結果として、社会との致命的な対立を招くことなく、男性の領域であった高等教育を女性にも開放する余地が見出されたのだと捉えるのであり、彼女達の保守性を、現実的な社会順応性の知恵としていわば肯定の意味合いでも把握している。

さらに言うなら、カレッジの女性達によるそうした保守的なあり方を、高等教育の獲得という至上目的を達成するための意図的、あるいは、戦略的な要素さえ帯びた



態度であったとも、筆者は考えている。その根拠として、ガートン・カレッジの学生であったメイナード (Maynard, Constance Louisa) の言葉ほどの好例はないと思われる。

私達に敵対する者の非難に用心深くあらねばならないし、その上、私達が進もうと望む以上に私達を急かしたる数少ない私達の支持者の熱意にも用心せねばならない…。当時に広まっている慣習というのは、新たな大志(文脈上、カレッジでの高等教育の享受を指していること — 筆者)のための最良のシェルターであって固く守った。…服装でもマナーでも社会の通則からのきわめてわずかな逸脱も、それを回避する不文律が定められていた。(下線は筆者)

同じく、メイナードは、学友である一学生について、バラ色の頬をした上品な学生で、上品に振るまい、上品な身なりで、彼女が学問に精通しているとは思えない、とあるレディが、コメントしたことに対して、その学生が、「女性らしさの指標の言葉である [上品 (nice)] という称賛を得たことは、取るに足らないと思われるかもしれないけれども、(カレッジの中での — 筆者) 私達のひそかな成長や目的の達成にとっては最良のシェルターであった」とも述べている<sup>25</sup> (下線は筆者)。

要するに、カレッジの女性達がカレッジでの高等教育を享受するに際してとった態度は、ヴィクトリア朝時代のミドルクラスの女性として不可分の自己犠牲的で家庭に特化した理念に抗わずに、これとの調和を図りながら、伝統的に男性の領分である高等教育という知的世界へのアプローチが容認されるよう、ある意味 意図的・戦略的な意識の下で、周囲の状況を勘案しつつ自身のあり方を選択していくというものであったと思われる。

ここで、本節の冒頭で取り上げた、デラモントの定義である「二重の従順」と絡めて一言しておきたいが、カレッジの女性達は、「二重の従順」を、社会通念に翻弄されてやむを得ず受け入れたばかりではなかった点を指摘しておく。彼女達が、自分達へと向けられた当時の女性らしさの理念と、これと相矛盾する事柄としての高等教育との狭間に立たされ、「二重の従順」をしていたことに異論はない。だが、デラモントも論中で言及しているが、先で引用したメイナードの言葉などから推察した場合、カレッジの女性達の「二重の従順」を単純に不承不承の受動的な態度と理解するだけでは、実態を見誤っていると思われる。筆者としては、カレッジの女性達による「二重の従順」には、女性カレッジでの学問追求という大目的を果たすべく、能動的・意

図的・戦略的に引き受けた側面が多少なりともあったであろうと捉える。

### 3. オックスブリッジの女性カレッジが女性達の人間形成に果たした教育的役割と意義

以上では、カレッジの女性達が厳しい文化的・社会的制約状況に置かれたこと(1節)、その中において、彼女達が、自分達に向けられた自己犠牲的で家庭重視の価値観は保持し、これと折り合いをつけつつ、男性のテリトリーであり続けた高等教育への参入者となるべく、場面によっては意図的・戦略的な態度を示しながら、革新性とジェンダーに起因する保守性が混在する二面性を備えていたこと(2節)を主に述べてきた。

翻って、(冒頭で言及したが、)ギバートは、市民大学の女性達というのは、カレッジの女性達ほどにはミドルクラス女性に向けられた社会通念に束縛されなかったことを論じているが、市民大学とカレッジの両高等教育機関を比較検討するのならば、氏の見解は妥当と言えるであろう。氏が例示するように、市民大学は、創設当初から男女の別なく学位を開放してきたし、カレッジの女学生が男性と接触するケースが想定される所で課されていた女性の同伴者であるシャペロンは、市民大学の女子学生には課されなかった<sup>26</sup>。これらから判断する限り、カレッジが相対してジェンダーにとらわれていたことは明らかである。

しかしながら、筆者が以下で論じていくように、ギバートが主張するところの、市民大学とカレッジの相違点の1つとしての活発な課外活動は、カレッジにも同様に該当したことなのである。また、氏は、市民大学が、当初通学制を採用してカレッジにならった寄宿制度を義務づけなかったことにより、市民大学の女性達は、カレッジに見られた「団体的、かつ、比較的世間との交渉を絶った生活を決して経験しなかった」とし、市民大学による女性達への監督や規制が不要だった点を評価し<sup>27</sup>、カレッジ内での寄宿のシステムを、女性達を拘束する枷としてネガティブに捉えているが、筆者としては、その学寮生活の経験ゆえに獲得できた、計り知れない教育的効果がカレッジには存在したと考える。

したがって、以降では、カレッジ生活を経験した女性達の回想やカレッジが創造した文化から、カレッジを今一度捉え直したい。確かに、ギバート達が述べるように、ジェンダーを基底としたカレッジの保守性は否めないが、このことを相殺して余りあるほどの教育的役割と意義をカレッジが持ち得たのだとして積極的な評価を筆者は試

みたい。

それでは、当時の女性の高等教育に批判的なまなざしの中にあつて、その只中に足を踏み入れようとした女性達の述懐を取り挙げていくことにする。自分達姉妹のかつての家庭生活を、「鶏小屋に閉じ込められた鷲」と表現しているメイナードは、23歳で伯母を訪問する目的で出かけた初の1人旅でヒッチン・カレッジの存在を聞いたが、その時、「ここです。あなたがずっと待ち続けていたのはそれなのです」という示唆を心の中に感じ取ったといい、「何て興味深いのでしょうか！ぜひ行ってみたい！」、「決して両親に背いたりはいしないけれど、ああ、そこに行くためなら何だってするわ」<sup>28</sup>と思ったという。そして、「カレッジに進学してからの数学期の間は、何とも言えない喜びに包まれて朝を迎え」、「[またカレッジでの1日が始まる！]」と思ってやる気に満ちて1日を開始し、「あまりの熱心さで時間がまたたく間に過ぎ去り、新しい活動を満喫する間もないほど」であつたという<sup>29</sup>。

ラムズデン (Lumsden, Louisa Innes) は、20代後半に『マクミラン・マガジン』の記事を通じてヒッチン・カレッジを知つたが、「学問に励む女性達の共同生活体に、ひょっとしたら属せるかもしれないと思うと、即座に私の大志を燃え立たせた」と述べている<sup>30</sup>。

これらの引用から推察されるのは、女性が高等教育を享受することへの偏見が歴然とする時代にありながらも、カレッジこそ志すべき方途と確信し、これを成就したいと願う女性達の切実なる思いであり、あるいは、実際にカレッジ生活を謳歌できる歓喜の念である。

ミドルクラスの女性が自らの意志に誠実に行動する生き方を、利己的でリスペクティブなレディに反すると糾弾するヴィクトリア朝期の厳格な時代状況であつたからこそ、彼女達がカレッジという高等教育機関に参入すること自体にすでに少なからぬ意味があつたと推測されるし、後で論じるような活発で豊かなカレッジ文化が創出され、結果、女性達が人間形成をなす上で一定の役割を担つたことは、特筆され、より一層評価されるべきことだと思われる。生活と学びが不即不離に一体化した、ある意味で緊張感を伴うカレッジに女性達が身を置き、学問であれ課外活動であれ、仲間と切磋琢磨しながら存分に追求できる場所が与えられたその意義は計り知れなかつたと考える。

(先述のように、)ギバートは、世間との交渉を絶たれているカレッジの寄宿システムをデメリットとみなすが、筆者としては、当時の社会的・文化的状況と連関させた場合、カレッジがある程度世間から遮断され、周囲との物理的・精神的距離を保て

る学寮制度を確立したからこそ、女性達の意志が尊重され、各人の求める事柄に没頭することや、仲間同志での緊密な関係を取り結べる環境の実現をみたのだと理解する。それでは論を転じて、カレッジが創出した文化に関し、女性達の人間形成が図られる上で筆者が特に重要視する3点——①討論 ②ココア・パーティー ③個人部屋——に焦点化して述べることにする。その理由は、「ココア・パーティーと討論は、カレッジ・ライフで頻繁に言及される2つの慣行」であって、これらを通じ、女性達は「アイデンティティーや個性といったものが強められるのを経験」したからであり、「同様に、カレッジ生活に関する記述の中で強調されるのが個人の部屋」<sup>31</sup>だからである。よって、ここからはカレッジの課外活動面を集中して取り上げることになる。だが、無論カレッジが学問を中核とする機関であることは十分認識しており、その側面を軽視する考えがないことを断っておく。一連の学習行為——女性達の学問的刺激への関心に応え、各人が到達目標を見据えつつ、大学の男性達と同種の学問に取り組んで対等に試験を受け、知的成長と（当時はいまだ学位は不認可であったが）知的証明がもたらされる——は、カレッジにおける中心的要素を負っている。しかし、あえて課外活動に筆者が注目するのは、上記3つを始めとする活動を経験していく過程で、女性達が強烈な印象を受けて有益な体験を積んでいったと把握するからであり、学習面と遜色がないほど女性達の人間的発達が促されたその意義を明確にしたいがためである。

では、①の討論から述べ始めることにする。カレッジでは大小様々な規模のバラエティー豊かなクラブが結成されたが、とりわけ活動が盛んであったものに討論があり、定期的に全体規模で行われた。議論されるテーマは討論会が開催される数日前に学生に伝達されて抽象的な類が好まれたという。議題の例としては、「自分の良い意見を啓発するのは多くの人にとって良いことであるか？」とか、「より一層考えるために、私達はあまり読書をするべきでないか？」<sup>32</sup>などがあった。1年に1回程度、ガートンとニューナムといったカレッジ間での討論会も開催されたようである。かつてのニューナム・カレッジの学生であり、後に古典学・精神学の研究者となるメリフィールド (Merrifield, Margaret) は、1876年のある討論会での体験を回想している。

私達は先週の木曜日に非常に興味深い（小規模の）討論をした。議題は〔教育の一方法としての演劇〕であった。…誰も発言者がいなくなり、私が発言しなければならなくなったが、かつて行ったスピーチの中で最高であったと自分では思う。私は本当に自身のテーマに興味があったし、そして何人かが私に賛同して欲しいと思っ

た。結果、ほんのわずかのためらいも困難もなく何分間か発言した。そして、私が以前には決して話さなかったテーマに関する自らの意見を、つまり、私自身の意見をたずねられた際に私が考えた意見ではなくて、私が本当の意味で考えた意見を話したのである。<sup>33</sup>

当時は、女性は公の場において静粛にすべきであるという聖書の教えに典拠を求め、女性は公の集会で演説をすべきでないとの世間一般の認識があった<sup>34</sup>。デイヴィースが、1864年の社会科学振興全国協会の年次大会に、女子中等教育を改善する必要を主張する自分の論文を、勅任視学官のフィッチ (Fitch, Joshua) に代読してもらったとのエピソードもある<sup>35</sup>。こうした風潮の下にありながら、カレッジの女性達が定期的に自らの意見を表明してディベートする機会と術を持っていたことは注目に値する。彼女達は、仲間と論を交える過程で、自らの考えを相対化し、表現力や見解を深化させたであろうし、また、論理的で説得力のあるスピーチの方法を鍛え上げ、自信をつけていったと思われる。

次に、②のココア・パーティーについて言及することにする。これは仲間と交流する日常的な習慣であり、もてなしをするホステス役がココアとケーキを用意し、ゲストがこれらの味と会話を楽しむという くだけた語らいの機会であった。一般に深刻な話題はタブーとされ、ゲームや歌が場を盛り上げたという。同パーティーは午後10時過ぎから約1時間開かれるもので、「部屋着の女性達が陽気な笑い声や話し声のする部屋に急ぐ姿が見られ、…社交の最高の時間」<sup>36</sup>であったという。ニューナム・カレッジのナッチブル・ヒュージェスン (Knatchbull-Hugessen) による、家庭では、「女性は、スクワイアの娘とか、あるいは、牧師・医者の子供とかである。すなわち、彼女のアイデンティティーは借り物」である。「(一方の)カレッジにおいては、彼女の身分はささいなことで、最も重要なのは彼女の性質である」<sup>37</sup>の言葉のように、カレッジでは、社会的身分で仲間を判断して交際するのではなく、対等な立場で個人の特性を判断基準に友好関係を取り結ぶ傾向が認められたが、日常的な集いとしてのココア・パーティーというのは、友情を培う絶好の機会を用意したであろう。なお、ガートンの一学生が、「メンバーに公共心を課す多くの活動と自制があり、そして、メンバーが共感によって団結していればいるほど同様に喜びも増し、各自の責任も増え、また、どの学生の成功や卓越も他の学生達の満足の根拠である<sup>38</sup>」と述べたように、カレッジでは共同の連帯意識も重んじられた。ココア・パーティーを始めとする仲間との交わりの中で、共に飲食し、話し、笑い、歌うという行為が結束をゆるぎないものと

し、カレッジの一員・同志としての一体感の育成に寄与した部分は大きかったと思われる。

それでは、筆者が重視するカレッジ文化のうちの③個人部屋に関し、カレッジで提供されたこの個別的な空間が、女性達の発達に及ぼした効果について論じていきたい。デイヴィースの指摘するところである、当時のミドルクラスでは、「家族全員が1つの部屋に集まることは普通である。各人があらゆる邪魔の犠牲者同然で、女性の個人的な活動は中断させられるのであり、いわば誰かのために、つまらないことであろうと重要なことであろうと、いつ何時でも、個人的な活動は中断されがちである。当然の帰結として、こうして半ば占拠された人達は互いを食い物にする<sup>39)</sup>」のように、ミドルクラス女性にとり、プライベートな時間とスペースが確保されることはきわめて例外的なことであった。

女性達が、家庭内で、彼女だけのために用意された空間で存分に活動することが望めない事情があった時代、カレッジという場において外界を遮断し、自らのために自らの意のままに支配できる空間と時間が保障されていたこと、自己に沈潜できる自由が獲得されていたことの意義は想像以上であったと理解する。デイヴィースは、「この偉大なる恩恵、1人であることの効力はカレッジ・ライフの最大の特質であろう<sup>40)</sup>」とも述べているが、干渉を受けない個人的空間の中で、自分自身の内面を徹底的に掘り下げることが可能としたカレッジのこの側面が、女性達の自己形成や精神的自立に果たした意義は大いに注目・評価されるべきことだと筆者は考える。なぜなら、トゥアン (Tuan, Yi-fu) が『分節世界と自己——集団生活と個人意識——(*Segmented Worlds and Self: A Study of Group Life and Individual Consciousness*, 1982)』で論じるように、空間が分節化されることによって個人の意識は強化されていくとみなされるからである。「明確に考え抜くためには、我々は周りからの分離をさらに一段落進め目を閉じ世界を閉め出さなければならない<sup>41)</sup>」のであり、私的空間においてこそ、自らのアイデンティティーをめぐる思索は深まるのだと思われる。

ウルフ (Woolf, Virginia) もまた、『自分だけの部屋 (*A Room of One's Own*, 1929)』の著作において、女性が文筆活動をする際の必須条件の1つとして「ドアに鍵のかかる部屋を持つ」ことを挙げ、これを「自分で思考する力」の象徴としているが<sup>42)</sup>、カレッジが女性達に用意した自室にも、鍵に相当する「取り込み中」のカードがあり、これが取り払われな限りは誰もその部屋には近づけなかったという<sup>43)</sup>。「たとえ女性達の部屋がわずか 14 × 12 フィート (ニューナム・カレッジにおいて最小) であったにしろ、そこは完全に彼女達のものであり、学長であってもノックなしには入

室できなかった<sup>44</sup>」のである。レディ・マーガレット・ホールの学生であったペック(Peck, Winifred)は、「友人からも親類からもそして女中からも邪魔されないことをわかっているのは本当に自由だということです。私達姉妹は家では各自の部屋を持っていましたが、寝室は共有でしたので、人生で初めて真のプライバシーを知ったのです<sup>45</sup>」との回想をしているが、彼女のように、カレッジでの個室を所有できたことを契機とし、プライベートというものの真意を女性達は認識したのでなからうか。なお、資金難が理由で、カレッジから各部屋へは最低限の家具しか供給されなかった事情があったが、逆にこれが功を奏し自己表現のチャンスを生み出したようである。女性達は仲間のインテリア・コーディネートセンスに刺激を受け、自分好みの個性的で快適な住空間を整えることに創意工夫をこらしたといい、部屋の様子というのも、当時のカレッジの女性達によって好んで取り上げられた記述内容の1つとして散見される。

## おわりに

以上、本論文では、1節でカレッジの女性達をめぐる文化的・社会的制約の状況に関し言及した。2節でカレッジの女性達の保守性と革新性を共存させた二面性について述べた。3節でカレッジでの女性達の回想やカレッジが創造した文化からカレッジを捉え直し、彼女達の間人形成に寄与した教育的役割と意義に関する積極的な評価を試みた。

カレッジの女性達は、自分達に向けられた「家庭重視イデオロギー」や「自己犠牲」を旨としたジェンダーに起因する社会通念の不自由さを感じながらも、こうした価値観に真っ向から対決せず折り合いをつける態度でカレッジでの生活に臨んでいたが、この彼女達の保守的なスタンスこそが、カレッジという高等教育機関での経験の確保へと結びつけたのだと思われる。また、ヴィクトリア朝期の家庭的任務へ収斂した理念が堅固であるという時代状況を鑑みた場合、彼女達は、人生の一時期を、家庭のしがらみから離れた場所で、自らのため自らの意志に忠実に自らの探求したい事柄に時間と労力を傾注できることの貴重さを痛感し、カレッジでの日々を有意義なものにしようと努めたことが推測されるので、女性達がカレッジに身を置くことそれ自体に少なからぬ意味があったと筆者は理解した。

さらに、筆者は、討論やココア・パーティーといったカレッジで展開された課外活動に着目し、このような活動を仲間と分かち合うプロセスにおいて、カレッジの女性

達が、コミュニケーションの力を高め、友情や連帯感といった価値を体得したことを論じた。同時に、筆者は、個人部屋を拠点とした営みが、カレッジ生活に内包されていた点、その私的な空間でなされる、カレッジの女性達各人による自己形成の重要性にも注目した。

すなわち、彼女達は、外に向けて自己を表現する機会と自己の内に閉じて思索する機会を兼ね備えていたのである。仲間と協同する活動と個人的活動の双方を通じ、自身を客観的に捉えたり、あるいは、主観的に捉えたりしつつ、自身が判断と認識の当事者となって主体的に自己決定と自己定義を行ったことが考えられるのであり、要するに、カレッジという場に果敢に身を投じた彼女達が、カレッジ特有の文化を自らのパーソナリティー形成に利したところにカレッジの教育的役割と意義が存在したのだと筆者は諒解する。

#### 注

注1. 古典的研究の例としては、Zimmern,Alice, *The Renaissance of Girls' Education in England : A Record of Fifty Years' Progress*, 1898. などがある。

また、古典的研究に対する修正の研究例としては、Pedersen,Joyce.Senders, *The reform of girls' secondary and higher education inVictorian England : a study of elites and educational change* , 1987. , Delamont,Sara, 'The Contradictions in Ladies' Education'・'The Domestic Ideology and Womens' Education'in Delamont,Sara and Duffin,Lorna(eds), *The Nineteenth-Century Woman : Her Cultural and Physical World*, 1978. などがある。

注2. 市民大学(civic universities)とは、イギリスの各地方産業都市に、19世紀後半から創設された大学、および、ユニバーシティー・カレッジのことである。同大学や、その中での女性達の動向に関しては、以下の研究などがある。

Gibert,Julie, 'Women students and student life at England's civic universities before the First World War', *History of Education*, 1994, Vol. 23, No4. , Dyhouse,Carol, *No Distinction of Sex? Women in British Universitiesn1870-1939*, 1995. , 香川せつ子、「19世紀イギリスの市民大学と女性の高等教育——女性教育団体の活動を中心にして——」、『西九州大学・佐賀短期大学紀要』34号、2003年。

注3. Gibert, *op.cit.*, pp. 421-2.

注4. ピーター・ゲイ著、田中裕介訳、『シュニツラーの世紀』、岩波書店、2004年、p. xii.

注5. 村岡健次、『近代イギリスの社会と文化』、ミネルヴァ書房、2002年、35-6頁。



- 注 6. 井野瀬久美恵編、『イギリス文化史入門』、昭和堂、1994年、135 - 7頁。
- 注 7. 「家庭の天使」なる呼称は、パトモア (Patmore, Coventry) の同名の著作に由来し、当時のミドルクラスの女性の良妻賢母という望ましいあり方を象徴するものとして浸透し、やがてヴィクトリア朝期の理想の女性の不朽の呼称として定着した。
- 注 8. ただし、ピーダースンなどは、女性達が家庭という私的な領域に必ずしも留まっておらず、慈善活動や教職などの有給職についていたことを強調しており、当時の男女の分離領域の概念に対する異議が唱えられている事情があることも指摘しておく。
- 注 9. Purvis, June, *A History of Women's Education in England*, 1991.
- 注 10. 山口みどり、「「ホーム・ドーター」—— ヴィクトリア期女性のライフコースからみた Separate Spheres 論 ——」、『洛北史学』5号、2003年、3頁。
- 注 11. Sewell, Elizabeth, *Principles of Education*, 1865, pp.462 - 3.
- 注 12. Schools Inquiry Commission Report volume IX, pp.792-3.
- 注 13. Dyhouse, Carol, *Girls Growing up in Late Victorian and Edwardian England*, 1981, p. 73.
- 注 14. Burstyn, Joan, *Victorian Education and the Ideal of Womenhood*, 1980, pp.145-64.
- 注 15. 同カレッジは、1869年に、デイヴィースのイニシアチブによってヒッチンに開校した女性カレッジであり、1873年には、ケンブリッジ大学により近いガートンの校舎に移転し、ガートン・カレッジ (Girton College) と名称変更した。
- 注 16. Williams, Perry, 'Pioneer Women Students at Cambridge', 1869-81, in Hunt, Felicity (ed), *Lessons for Life: The Schooling of Girls and Women 1850-1950*, 1987, p. 174.
- 注 17. Williams, *ibid.*, p. 184.
- 注 18. Brittain, Vera, *Testament of Youth: An Autobiographical Study of the Years 1900-1925*, 1933, pp. 67-74.
- 注 19. 同カレッジは、1871年に、ケンブリッジ大学教師シジウィック (Sidgwick, Henry)、そして、クラフ (Clough, Anne Jemima) を中心に創設された。
- 注 20. Delamont, 'The Domestic Ideology and Women's Education', p. 181.
- 注 21. Delamont, 'The Contradictions in Ladies' Education', p. 140・160.
- 注 22. Vicinus, Martha, *Independent Women: Work and Community for Single Women 1850-1920*, 1985, pp. 143-4.
- 注 23. Green, Laura Morgan, *Educating Women: Cultural Conflict and Victorian*

*Literature*, 2001, p. 8.

注 24. Dyhouse, *Girls Growing up in Late Victorian and Edwardian England*, pp. 73-4.

注 25. Maynard, Constance Louisa, *Between College Terms*, 1910, pp.189-90.

注 26. Gibert, *op.cit.*, pp. 405-6.

注 27. Gibert, *ibid.*, p. 407・410. しかし、市民大学が拡大して遠方から学生が集まるようになった際、自宅・親類宅に住めない女子学生には、大学設置の学寮への居住が要求されるようになった。

注 28. Firth, Catherine Beatrice, Constance Louisa Maynard, *Mistress of Westfield College*, 1949, p. 93.

注 29. Maynard, *op.cit.*, p. 182.

注 30. Williams, *op.cit.*, p. 173.

注 31. Williams, *ibid.*, pp. 180-1.

注 32. Field, Eleanor, *Women at an English University : Newnham College*, p. 291.

注 33. Phillips, Ann(ed), *A Newnham Anthology*, 1979, p. 6.

注 34. Burstyn, *op.cit.*, p. 146.

注 35. Purvis, *op.cit.*, p. 73.

注 36. Field, *op.cit.*, p. 292.

注 37. Knatchbull-Hugessen, Eva, 'Newnham College from within', *The Nineteenth Century*, Vol. 21, 1887, p. 854.

注 38. A Girton Student, *Life at Girton College*, 1882, p. 9.

注 39. Davies, Emily, 'Home and the Higher Education' in Davies, *Thoughts on Some Questions Relating to Women, 1860-1908*, 1910, pp. 152-3.

注 40. Bradbrook, Muriel, 'That Infidel Place': *A Short History of Girton College 1869-1969*, 1969, p. 40.

注 41. イーファー・トゥアン著、阿部一訳、『個人空間の誕生 ―― 食卓・家屋・劇場・世界 ――』、せりか書房、1993年、187-8・303頁。

注 42. ヴァージニア・ウルフ著、川本静子訳、『自分だけの部屋』、みすず書房、2003年、159-61頁。

注 43. Field, *op.cit.*, p. 292.

注 44. Williams, *op.cit.*, p. 181.

注 45. Purvis, *op.cit.*, p. 118.